

持続的な森林保全に向けて <その5>

マリでの里山再生活動と村人の協力

NPO サヘルの森の現場スタッフとして、マリ共和国の里山再生に取り組んでいる。マリの森林状況、といっても幹線道路とその周辺の村々の見聞でしかないが、まとまった高さのある「森林」は、保護林を除けば、ごくわずかである。多くの森林は伐採されて低木林やブッシュ、原野のような荒廃地となっている。持続利用可能な森林としての里山をいかに回復、再生していきけるか、その課題は重い。

1. 村人の協力

我々はマリ行政とのパイプを持たない。多くの村人に有用な果樹や資材用の苗木を直接に配布し、緑づくり運動を広げようことを試みている。我々の活動が信用され、緑化に取り組むことが有益であることを理解されるように、何度も同じ村に通い、苗木配布・植林を繰り返してきた。村人は自分で育てたものを自分で利用、販売できることで、緑の有効性を実感できる。2017年には村や学校などを含め、77か所を訪れ、提供した苗木は2.1万本余に至る。

やる気のある村人に技術研修を実施し、里山再生等の担い手となれるように進めている。その内容は、播種からポット苗木づくり、接ぎ木、苗木管理などである。研修者は終了後も講師の苗木生産者と情報交換ができるような体制ができつつある。

2. 里山再生に向けてのステップと適正技術

村人は、苗木が家畜に食われる、かん水不足やポットを付けたまま植えて枯れるなど、多くの失敗を重ねながら、樹木の育成が出来るようになってきた。野菜作りのための菜園は、柵がしっかりしているので樹木の育成にも有効である。このような形態の緑の拠点を村の中で増やして行くことにより、資材や果樹生産につながる。さらに、農地周辺の耕作放棄地、低木林やブッシュなどの里山再生に目を向けてもらえるよう考えている。一部ではすでに耕作放棄地でのユーカリ植林が進められている。

植栽を進める土地の条件は、カチカチのシルト質土壌、風化軟岩地など様々であり、農地以外の場所は荒廃地が多い。村人が緑化を進める際の参考とな



アリ塚植林

生垣づくり

るよう、荒廃植林試験地や借用農地で適正技術による見本林づくりを進めている。アリ塚や盛土への植林、有刺樹木の生垣、果樹の剪定などがある。アリ塚は、土中下部に巣穴が掘削され、苗木根鉢がすっぽり入る空間が確保できる。これを利用してアカシアセネガルなどの試験植林を進めている。

3. 活動の持続性に向けて

・収入、有用性と結びついた資源育成と循環の形成
村人にとって有用であることが、活動の原動力になる。シアバターノキは油糧作物として役立つことから、比較的よく畑の中に残されてきた。自然の樹木でも、その収穫物が有用なものは比較的残存して利用されている。特に、果樹類は自家消費とともに、販売しての収入にもつながり、歓迎される。

また、ユーカリは荒れ地でも生育し、その成長の早さ、まっすぐな材で利用しやすく、萌芽再生することから人気がある。耕作放棄地でまとめて生育させる人もいる。荒廃地、斜面地等を利用した資材生産につながればと思う。ニームやカイセドラ(ドレイマホガニー)は緑陰樹として活用されている。

・資源の加工、利用の工夫による付加価値付け
果樹は収穫期が短期間の種類が多く、一度に多量の収穫物が市場に出回るため、青果は安価となる。付加価値を付けるために、加工は重要である。加工にあたっては、衛生問題とともに、雨季と重なるため、施設の整備等が課題である。

・農林複合栽培の推進
ソルガム・ミレット(穀類)とシアバターノキ(樹木)の組み合わせのように、すでに行われている方法であるが、農地で果樹(樹木)と野菜の栽培組み合わせを広げられないか。野菜の上部や生垣に適度な日陰となる果樹、有用樹を配置し、立体利用を探っていく。また、住居周辺に菜園を作ることが多いが、そこに果樹、有用樹を加えて、収入につなげる。乾季の水の確保、消費地である街の市場との連携や家畜との共存等が課題である。

4. まとめ

村人が持続的に活用できる簡易な技術・方法で、自分自身の活動を始めるようになれば、一步前進である。生活の足しになり、わずかでも収入につながるような仕組みが生まれ、その循環が成長することを期待している。里山再生までの道のりは長い。

(2018年3月 NPO サヘルの森 坂場光雄)